

教職大学院 Newsletter

No. 67

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2014.11.15

教育研究の成果を教員養成の現場に

— ティーチャーズカレッジの試み —

コロンビア大学・ティーチャーズカレッジ 教育政策研究所 (CPRE) 研究員 長倉 若

ニューヨーク、西ハーレムに位置するコロンビア大学・ティーチャーズカレッジ (Teachers College: TC) は、1887年に教員養成の専門機関として創立されて以来、現在にいたるまでアメリカ教育界を牽引してきました。特に、多分野の“知”の連携、教える者の専門知識の養成、学ぶ者についての理解、効果的な教授法の確立という4つの柱を基本に、様々な研究、指導実践、教員養成活動を行っています。教育を“人権”と考え、だれでもが必要な教育を享受できることを目指して、公教育の充実に力をいれてきました。現在、125年を越えるその歴史を礎に、新しい教育技術の活用、21世紀に必要とされる生徒、教師の育成にさらに力を注いでいます。

そのTCのなかにあるCPRE (Consortium for Policy Research in Education) は、教育政策についての研究、提言をする教育系大学院の共同体です。今の社会に必要な研究テーマの設定、研究方法の検証、分析などを共同で行い、お互いに協力して知見を高めていこうというしくみで、ハーバード大学、ペンシルバニア大学、スタンフォード大学、ミシガン大学など7大学で構成されています。その活動の中心は、国家レベル、州レベルの教育政策の評価測定から、個別の教育プログラムの実施検証、効果測定などに当てられています。また、それらの研究結果、知見をいかに教育現場につなげていくかというプロジェクトも行われています。

このたび、福井大学教職大学院で教鞭をとる先生方にCPREを訪問して頂いたことは、アメリカの現状を基本に教育について考える我々が、日本の教育、教員養成の実践を知る貴重な機会となりました。我々は教育研究以外にも、世界各国で教員養成のプログラムを実施しており、その国の状況に合ったプログラムを考案しているからです。コロンビア大学の国際的な展開

を支える“グローバルセンター”との連携により、現在までに8カ国で活動を行ってきました。最近のプロジェクトとしては、ヨルダン女王の設立した教員養成所においての、プログラムの開発・実施、タイにおける数学、理科スタンダードの見直しと提案、職業教育の導入についての提案、教員の教授法トレーニング、ポーランドにおける教職大学院の設立準備などがあります。

このように現場での活動をしていると、大学という大きな組織の中にながら、現場の先生と接する機会を持ち、研究結果を現場で“使える”ようにすることの重要性を痛切に感じます。福井大学教職大学院が実践されているような現場の先生との共同活動や教師が現場を離れることなく研鑽をつめるシステムの構築などは、大変興味のあるプログラムだと思います。

日本の教育界で今後重要であると思うことは、教育“効果”を検証、測定するという姿勢ではないかと思えます。加えて、生徒の一斉テストの結果を論じるだけでなく、生徒を多面的に理解すること、彼らの人間としての成長を支えてゆく方法を考えることは、今後大きな課題となっていくことでしょう。

また、英語教育の転換、充実が叫ばれる日本にあって、今後の英語教育の進展には大きな期待を持っています。学生の国内思考が叫ばれるなか、性急に海外留学が奨励されていますが、準備なしに留学をしても目的が達成されないのは言うまでもありません。大きな視野をもった包括的な政策が立てられ、英語力の養成はもちろんのこと、さまざまな人種、言語、価値観が存在する社会のなかで、しっかりと“日本”について語り、世界のなかの自分という視点をもつ若者の育成が急務であると思えます。今後の日本の教育界がどのように変容、進化していくのか大変楽しみです。

夏の研究報告（海外編）アメリカ訪問調査報告

ボストン・ニューヨーク 教師教育の国際動向調査の報告



平成26年9月14日（日）から9月23日（火）まで、アメリカのボストン市にあるボストン・カレッジとハーバード大学、更にニューヨーク市にあるコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジを訪問した。調査メンバーは、福井大学教職大学院の二宮秀夫、木村優、半原芳子、教育実践総合センターの遠藤貴広、高等教育推進センターの山崎智子の5名で、福井大学教職大学院が今後導入を考えているEd.D.(Doctor of Education)を中心に、それぞれの大学の教師教育の取り組みを聴取し、その現状や動向についての調査を行った。また、最初に訪問したボストン・カレッジでは、同カレッジの院生や教授陣を対象としたセミナーで、木村准教授が日本の教育の変遷についての招待講演も行っている。その内容のいくつかをこの場を借りて報告する。

ボストン・カレッジ 招待講演

“Educational Change in Japan” from Yuu Kimura and Colleagues

福井大学教職大学院／准教授 木村 優

今年の初夏、9月に控えたボストン・ニューヨーク調査のアレンジメントをしている最中に、ボストン・カレッジのアンディ・ハーグリーブス教授からメールが届いた。「訪問日程の調整だろう」と思ってメールを開いてみると、そこには「9月にボストンに来られるのなら、ついでにうちのセミナーで日本の教育改革の動向について話してくれないか」という依頼だった。その時は軽い気持ちで快諾したのだが、いざ9月にボストン・カレッジのLynch School of Education（教育学部）に来てみるとセミナーの案内が至る所に貼られており、しかも同セミナー・シリーズの第一弾として私の講演が設定されていた。もちろん私は驚きと緊張に苛まれることになったのだが、それでもセミナーのポスターには“Yuu Kimura and colleagues”と書いてあったので少しほっとした。仕事を共にする同僚が同じ場所にいてくれるだけで安心だったし、質疑でも助けてもらえるので心強かった（実際にたくさん助けてもらった）。

平成26年9月16日午後1時，“Educational Change in Japan”というタイトルで招待講演を行った。講演ではまず、少子高齢化社会、グローバル社会、知識社会が同時に進行する日本において、90年代から「学習の転換」の動きが始まり、「生きる力（Zest for living）」に象徴される新しい指針や要求が学校と教師に課せられてきたことを紹介した。次に、その指針や要求が日本の教師の就労状況から見るとプレッシャーにもなって



いることをOECDのTALIS2013（国際教員指導環境調査）のデータを引用して示しつつ、日本の教師の専門性開発に対する意欲の高さ、授業研究文化の卓越さも紹介し、教師の学びと専門性開発を支え促すシステムレベルのイノベーションの必要性を訴えた。そして最後に、イノベーションの一つとして福井大学教職大学院の理念と取組を説明し、私たちの挑戦が専門職の学び合うコミュニティを学校の中で創り出し、教師の生涯



にわたる成長を支えるモデルとして成果を示しつつあることを紹介した。

聴き手からは日本の授業研究の進め方や福井大学教職大学院の成果の具体に関する質問をいただいた。また、ハーグリーブス教授からは、文化的な相違を超え

て日本の教育の「ハイ・パフォーマンス」を可能にする「秘密」を学ぶ必要性が最後に提起された。

今回の招待講演は、国際学会の研究発表と異なり海外大学のセミナーで話すということで、私にとって本当に貴重な体験（Brilliant Experience）だった。

ボストン・カレッジにおけるEd.D.プログラム

福井大学高等教育推進センター／特命助教 山崎 智子

平成26年9月16日（火）、ボストン・カレッジのEd.D.プログラム（正式名称The Professional School Administrator Program : PSAP）のコーディネーターである、ローリ・ジョンソン（Lauri Johnson）准教授へのインタビューを行った。PSAPは、マサチューセッツ州の義務教育に焦点を当てたプログラムであり、州内の教育に携わる専門職（校長、教育長など）の育成に特化している。また、もう一つのPSAPの特徴は、「チームでの学び」が3年間のカリキュラムを貫いており、博士論文もチームで執筆するという点である。つまり、興味関心が近い院生がチームを組み、一つの教育実践に関わるテーマについて、序章と終章はチームで執筆し、本論にあたる各章はそれぞれのメンバーが様々な角度からの分析を加えて執筆するのである。チームで博士論文を書くということは容易ではなく、実際には多くの課題があるというが、極めて挑戦的な取り組みであるといえる。

ハーバード大学のEd.L.D.についての報告と比較していただければわかるが、従来型のPh.D.ではないEd.D.や

Ed.L.Dなどの専門職のための博士号は、プログラム間の差異が大きい。日本でも博士レベルの教育の専門職学位の必要性が認識されるようになってきたが、多くのプログラムの実例を見て、良く比較し、どのような人材を育成したいのかを十分に検討してプログラムを作り上げていく必要性を強く感じた。



ハーバード大学の新学位Ed.L.D.

福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター／准教授 遠藤 貴広

平成26年9月のアメリカ調査で筆者は、スタンフォード大学、カリフォルニア大学バークリー校、ボストン・カレッジ、ハーバード大学、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジにおいて主に教師教育に関わる取り組みについての聴き取りや情報収集を行った他、ボストンのミッション・ヒル・スクール、ニューヨークのハーレム・ヴィレッジ・アカデミー・イースト小学校、アーバン・アカデミー・ラボラトリー・ハ

イスクール、マンハッタン・インターナショナル・ハイスクールという4つの異なるタイプの公立学校を訪問し、授業参観や聴き取りを行った。本稿では、9月17日に訪問したハーバード大学の取り組みについて報告したい。

ハーバード大学は教育分野独自の博士学位Ed.D.（Doctor of Education）創設の地として知られている。しかし、近年になって既存の博士学位Ph.D.（Doctor of

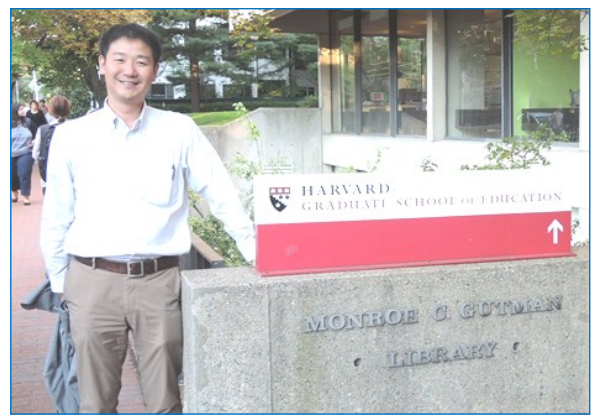
Philosophy) との違いが不明確になり、2013年度入学生を最後にEd.D.は廃止されている。その代わりにような形で創設されたのが、Ed.L.D. (Doctor of Education Leadership) である。9月17日のハーバード大学訪問時には、この新しい博士課程のプログラム・マネージャーであるスコット・アサカワ氏にじっくりお話しいただく機会を得ることができ、学位新設の経緯、これまでのEd.D.やPh.D.との違い、入学者選考の方法、カリキュラムの詳細、組織運営、修了認定の方法、修了後の進路、今後の課題等々に関わる裏事情を詳しくうかがうことができた。

このEd.L.D.コースの中心的なターゲットになっているのは、学校教育に関わるシステム・レベルのリーダーの養成である。そこで同コースは、教育学研究科のみならずビジネス・スクール(経営大学院)とケネディー・スクール(公共政策大学院)という3つの異なる大学院の連携の上に成り立っており、同コース所属院生は教育のみならず経営や公共政策・行政に関する授業も履修することになる。

実践を志向したコースで、3年目には州や連邦の教育省といった提携機関で有給の長期実地研修(regidency)が行われる。これらの成果は、既存の学問の枠組みに則った学術研究論文ではなく、「キャップストーン(capstone)」と呼ばれる叙事的・分析的・省察的な長期実践研究報告書にまとめられ、学位請求のための重要資料となっている。

以上のような情報は、同コースのウェブサイトからも知り得るものである。しかし、実際に行ってみて、実務担当者の生の声を聴いてみて、学位請求のための報告書(キャップストーン)を実際に見てみて、ようやくイメージがつかめるようになった。また、前日訪問したお隣ボストン・カレッジや翌週訪問したコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジのEd.D.プログラムとの違いも見えてきた。この多様性はきちんと整理した上で議論しないとややこしいことになる、と改めて感じた次第である。

急な訪問であったにもかかわらず丁寧に対応して下さったEd.L.D.コースのプログラム・マネージャー、スコット・アサカワ氏に改めて感謝申し上げたい。



アメリカにおける レッスン・スタディ(授業研究)の展開と課題

福井大学教職大学院/准教授 木村 優

平成26年9月19日、ニューヨークのコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジにおいて、アメリカの東海岸地域を中心に日本のレッスン・スタディ(授業研究)の普及につとめておられるハーレム・ビレッジ・アカデミーの吉田誠先生にお会いし、アメリカにおけるレッスン・スタディの展開と課題についてお話をうかがった。

日本の授業研究は、明治時代初期に導入されたヘルバルト式段階教授の授業の研究を起源として多種多様な様式で発展、拡大し、1990年代にジェームズ・スティグラーやキャサリン・ルイスらによって「レッスン・スタディ」として世界中で紹介された。吉田誠先生はアメリカにおけるレッスン・スタディ研究の第一人者であり、スティグラーの著書にも多数の論文が

引用されている。

日本の学校でごく当たり前に行われている「授業研究」は、教師の成長や子どもたちの学びの過程を見取り、分析するのに最も適した手法としてアメリカでも高く評価されている。吉田誠先生は日本語学校やニューヨークのハーレム地域にあるチャータースクールなどを中心にレッスン・スタディのコンサルタントとして従事し、日本で言うところの「公開研究会」を組織してその普及につとめておられる。

アメリカの教師のほとんどは「実習以外では授業を見合う文化をもって」おらず、教師の専門性開発の過程は個人に任せやすい。しかし、アメリカの教師たちも授業を互いに見合い、その後の授業研究会で子どもたちの学びの過程を語り合うことで自らの専門性開

発の手応えを得ている、とのことであった。

しかし、アメリカでは教師の職務制度が日本と異なることもあり、授業参観と授業研究会を行う時間を学校で確保するのが難しく、大学の教育研究者もレッスン・スタディの研究には即時的な「成果」の出難さからやや後ろ向きであるという。同様に、学校にも「成果」要求が過大であり、何らかの助成金を獲得してレッスン・スタディを授業改善と子どもの学びの改善の一方策として実施する学校もあるが、助成金の補助が切れるとレッスン・スタディの取組が立ち消えになることもしばしばだという。

吉田誠先生のお話を聴きながら、アメリカにおけるレッスン・スタディの展開を阻む文化的・制度的なブロックを改めて認識すると共に、そのブロックを打ち消す一つの取組が、福井大学教職大学院が行っている

「学校拠点方式」による学校組織構築支援であろうと考えた。また、アメリカの学校におけるレッスン・スタディの展開の「持続」を支えうる鍵は、校長・副校長によるトップ・リーダーシップにあると思えた。



ティーチャーズ・カレッジ教育政策研究所 (CPRE) —研究成果を教育現場の改善に—

福井大学教職大学院／教授 二宮 秀夫

今回のボストン・ニューヨークでの教師教育の国際動向調査も残すところ2日となった9月22日(月)の午後、ニューヨーク市コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ教育政策研究所 (Consortium for Policy Research in Education = CPRE) において、所長のトーマス・コーコラン氏と研究員の長倉氏からお話を伺った。このCPREは、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジとハーバード大学、ミシガン大学、ペンシルバニア大学、スタンフォード大学、ノースウエスタン大学、ウイスコンシン大学マディソン校の7つの教育系大学の研究者がコンソーシアムを組織し共同で教育施策の研究を行っている。



CPREでは、教育研究の成果を検証し、エビデンスに基づいた教育改善に当たっている。教育研究は教育の現場に実際に生かすことができるものであるべきであり教育研究者は研究室中心ではなく学校現場に入り研究をするべきとコーコラン氏は語る。ティーチャーズ・カレッジには多くの職業訓練プログラムがあり、そこでは実地訓練であるレジデンス・プログラムを採用しており、院生が大学で授業を受けながら一定期間学校へ行くことで、大学に戻ってからの話し合いが学校現場に即したものになるという。

ティーチャーズ・カレッジは、もともと移民の貧困層の子どもたち (disadvantaged children) のために効果的指導のできる教師の育成をめざし創立した大学である。そのため今でもエリート教育に焦点化するのではなく、もっと教育が必要だと思われるところに支援を行っている。この考えは、海外の教育支援においても同様である。国内の教育研究以外にも、コロンビア大学が国際的に展開しているグローバルセンターと連携して、これまで世界8カ国の教員養成プログラムを実施してきたが、いずれもその国の学校の現状に合った、現場にとって必要とされる教育プログラムを考え実施している。例えば、「カリキュラムはこれを用いましょう。」と既に用意したものを持ち込むのではなく、その国の要請に従ってカリキュラムをどうす

るのかを現地の相談を受けながら一緒に考え決定していくのである。支援の目的は最後には、現地の教員が自分たちだけで指導力を高めていくことのできる力を養成することにある。そのため、数人の教師だけではなくリーダーも含め学校全体で取り組むこと、また、4、5年のプロジェクトにより持続して指導力を向上させることのできる学校に変えていく継続的な取り組みを展開している。コーコラン氏は、一番大事なのは子どもたちであり、教師の指導力を高めることが最後に子どもたちにとっての利益になるという。全く同感である。

学校拠点方式をとり学校の課題について現場の先生方と協働研究を行う福井大学教職大学院の取り組みも、まさしく学校現場に生きる研究であり、ティー

チャーズ・カレッジの取り組みから多くの示唆を得ることができた。このような機会を作ってくくださったコーコラン氏、長倉氏に心から感謝申し上げたい。



大きな車輪と小さな車輪

ーミッションと一人一人の専門性の発揮の連環ー

福井大学教職大学院／特命助教 半原 芳子

私たちチームは、Ed.D.についての調査等共通のミッションとは別に、ボストン・カレッジでは先方のご好意で、各自の研究テーマと近い同カレッジの研究者らと個別に研究交流を行う機会をいただいた。ニューカマーの言語教育に従事している私は、移民政策の分析や移民の若者の識字教育に携わっているLisa Patel准教授と、バイリンガル教育および書き言葉の大規模調査を行っているMaria Estela Brisk教授のお二人それぞれと対談することができた。

移民国家とも形容できるアメリカでは、多言語・多文化社会の実現に向けEnglish Plus（「英語にプラスしてもう一つの言語を学ぶ」）政策をとる州と、合衆国としての統制を保つためにEnglish Only（「英語のみを教える」）政策をとる州とがあるが、ボストンがあるマサチューセッツ州は後者となる。柔和な雰囲気を纏うLisa Patel准教授は、English Onlyに抗い、移民の若者たちとの対話を継続して実践し教育から社会を変えていこうという強い精神力と実行力を持つ、パウロ・フレイレの理念を継承する、私と同世代の女性であった。生まれた国は違っても同じ時代を生き同じ問題意識を持っているLisa准教授との出会いは、研究上の大きなヒントと勇気と希望を与えてくれるものであった。Maria教授からは、バイリンガル教育を政策レベルで実現させていくための貴重なアドバイスをいただいた。「バ

イリンガル教育をやっていると私のようにあつという間に歳をとって白髪になっちゃうわよ」とユーモアを交え微笑む気品溢れるMaria教授からは、同士としての温かな励ましに加え大きな教育的課題にチャレンジしていくための覚悟を問われたようで背筋がピンと伸びる思いがした。この研究交流の時間は、自分の日々の実践へのエネルギーになると共に、この後に（まだまだ）続くEd.D.調査等への私の理解を大いに助けてくれるものとなった。

米国調査【大きな車輪】が充実したものになったのは、私たち一人一人の専門性【小さな車輪】が発揮される状況（チャンス・出会い・鮮やかな仕掛け）があったからだと思う。今回米国調査という大変貴重な機会をいただいたこと、そしてボストン・カレッジならびに米国で出会った方々に心から感謝申し上げたい。

スクールリーダーだより

福井県立藤島高等学校／野尻友佳子

藤島高校は創立159年、各学年9クラスの生徒が学習や課外活動に励む活気あふれる進学校です。授業や課題は難度が高く、多くの学習時間を必要としますが、それでも生徒たちは部活動その他の課外活動にも意欲的に取り組んでいます。SSH指定校でもあり、「研究」の授業等を通して探求心や多角的な力を育てています。

先生方は研究熱心であり、生徒の成長のために時間と努力を惜しまない雰囲気があります。生徒に関する話題はもちろんのこと、各自が行った教材研究において疑問に思う点などがよく議論の俎上に上がります。また、テスト問題の作成に心血を注ぎ、「問題検討会」において長時間意見をたたかわせています。若い先生や本校勤務年数の浅い先生は、ここで様々な視点を心得て勉強し、力を付けていくことができます。各自が作成した教材類は共有のフォルダにアップし、自由に加工して使用することができるなど、研究や勉強の成果を独り占めせず共有する伝統もあります。

「難関大学の入試問題を解く」ことは、本校教員に課せられた重要な課題の一つであり、どの教科の先生方も時間を使って取り組んでいます。その集大成とも言えるのが、センター試験後の「個別大学特講」であり、まさにこの期間は睡眠時間を削って問題研究と教材作成に取り組む先生方の熱気が学校中に漂う、といった感じがします。

このように以前から活発だった研究する雰囲気が、ここ数年、また形を変えてよりよいものになってきている気がします。意欲のある若い先生方がどんどん増え、本年度3名、昨年度1名の新採用教諭をはじめ、20～30代のパワーが学校を活気あるものにしてれています。



数年前から11月に公開授業週間を設けていますが、それ以外にも各教科で授業公開、授業研究が活発になされ、共同研究、視察などで校外からの参観者も多く、「授業改善」の視点でも活性化してきています。

また、学年主任のリーダーシップのもと、学年団が組織としてよく機能しており、多くの視点で生徒たちを見ていこうという雰囲気があります。現在私が所属する1学年では、朝の読書タイムの実施を全クラスで取り組み、「常に本を携え、知を求める藤高生」の夢が実現しつつあります。また文理選択、科目選択においても学年会で共通理解を図り、安易な選択をして後悔させないように丁寧な面談を繰り返し行っています。

教員も日々生徒とともに多くのことを学び成長している実感のもてる学校だと言えます。

坂井市立丸岡南中学校／中村敏明

自主研究発表会に向けて

今年度は、3年間をひとくくりとした自主研究発表会の本発表の年になる。事前の研究推進委員会での話し合

いをもとに、4月の第1回全体研究会で今年度の研究の方向が確認された。研究主任から研究主題「学び合う学校文化の創造」について、細かな確認がなされたが、そ

の中で特に今年度研究の力点を置きたいと考えたのは次の2点であった。

I 公開する授業は普通の授業とし、主に研究主題に沿った部分（生徒の学び合い）について協議する。

II メディアセンターの活用について教科を横断した取り組みの一つとして研究を進めていく。生徒の学習に対する意欲や関心を高め、学びを後押しする運営を教科の枠を越えて協議し、授業と連動したセンターの運営を模索していく。

このI・IIとも、日常の取り組みに直結したことであり、率先して取り組んでいきたいと決意を新たにした。そのため、6月の指導主事訪問日の研究授業と、7月の公開授業において、研究授業をさせていただいたが、普通の授業における学び合いはどうあるべきかという視点で授業を行った。

5月の全体研究会では、昨年度の1月に東京都の赤塚第二中学校の研究発表会に参加させていただいた時の様子を報告させていただいた。この私からの報告の後、昨年度に引き続き、小グループによる「メディアセンター探検」が予定されていたこともあり、上記I・IIの内容を中心に、撮影してきた赤塚二中の様子を見ていただきながら話をさせていただいた。全教員への話として特に強調したのは、次の2点であった。

- 丸岡南中のメディアセンターの掲示内容は、他県の中学校と比較しても、かなり充実している。自信をもって、引き続き全校体制で取り組んでいきたい。
- 同じ教科センター方式をとる学校でも、メディアセンターのオープンスペースに教員が常駐している学校は少ない。生徒がいつでも先生と話ができるメディアセンターをこれからも維持していくことが生徒指導上も大変重要である。

このメディアセンターの取り組みに関しては、うれしい結果が出た。1学期末の学校評価の生徒アンケートの項目「1. メディアセンターの掲示物や展示物により、

学習の意欲が高まりましたか」の問いに対し、肯定率（「Aそう思う」・「Bそう思うことが多い」の合計）が、昨年度末より11ポイントも上昇したのである。この4年間を見ても最も高い肯定率であり、昨年度からの学校をあげての取り組みの成果が数値となって表れた。これまでの取り組みの方向は間違っていなかったと確信が持てる結果であり、2学期以降も継続していきたいとの思いを強くした。

また、本校の研究体制は、授業研究を「授業研究部」、生徒指導面における研究を「育成研究部」とする二本立てで実践している。「育成研究部」の3部会のうち、私は、地域との連携を柱とした「共々に部会」の部会長を担当している。今年度は、校長のリーダーシップのもと、「一部活動ーボランティア活動」に新たに取り組むことになった。これは、「すべての部活動が、一回は地域の行事にボランティアとして参加しよう」という取り組みである。その第1回目の取り組みとして、1学期には、私が顧問をしている卓球部と、他に柔道部・情報部が日曜日に校区内の地区運動会に参加した。用具の準備や、選手招集などに意欲的に行動し、地域の方からは「来年もぜひ来てください。」とのお言葉をいただくなど、大変感謝された。また、10月には丸岡古城まつりの総踊りに部活動単位で参加した。事前に踊りの指導に来てくださった講師の方々は、あまりの元気の良さに感嘆の感想を述べていたが、その練習の成果もあって、男子バスケットボール部が優秀賞を獲得した。私は常々、丸岡南中学校の学校文化の根底には、スクエア制を軸として「自己肯定感を高める場」「共感的な人間関係の育成の場」「自己決定の場」がシステム的に保障されていることがあると考えているが、この考えが間違いではないことを再認識する機会となった。今後も、教師同士の協働、教師と生徒の協働、生徒同士の協働、インターン生との協働、教職大学院の先生方との協働、そして地域社会の方々との協働を実践しながら、生徒指導的な側面を高めていきたい。

福井市豊小学校／栢川正樹

福井市豊小学校は、福井市の中心からやや南に位置し、足羽三山と呼ばれる足羽山・兎越山・八幡山が校区周辺にあります。中でも、八幡山は本校の校庭のすぐ南

側に位置し、四季折々の色を見せ、私たちの目を楽しませてくれたり、様々な学習の場を提供してくれたりしています。例えば、クラブの中には「八幡山ウォッチング



クラブ」があり、山にある木々や昆虫などの生き物を観察したり、自然環境を守る活動を行ったりしています。

3年生の総合的な学習の時間では「みのりのお宝大発見」というテーマで、八幡山で学習したことをまとめます。「まちの先生」をゲストティーチャーにお迎えし、植物の名前の由来や生息している生き物などについて教えていただきます。そして、2年生に「パワフル学習発表会」（総合的な学習の時間の発表会）で自分たちの学習したことを発表することになっています。下級生に自分たちの学んだことを伝えることで、さらに理解を深められるとともに下級生にとっても、次年度学習することを教えてもらえるということで、双方に意味のある会になっています。この「パワフル学習発表会」は、縦割り活動の1つとして、全学年で行われています。

また、夏休みには八幡山で毎年植物採集会を開催し、たくさんの児童が参加しています。理科作品コンクールでは、多くの作品が入賞を果たしています。他にも、大休みには、八幡山をコースにした業間マラソンがあり、体力づくりにも活用されています。

さて、本校は平成20年度から5年間に渡り福井大学教職大学院の拠点校に指定を受け、これまでに大学の多くの先生方にご指導・ご助言いただき、研究を進めてきました。平成25年度からは連携校として、引き続きお世話になり、10月31日（金）には「自他の考えを大切にし、共に学び合う子どもたち」を研究主題に自主研究発表会を開催することができました。

今年度は、新しい研究主題になって初めての発表会となりました。変化の激しい社会環境の中、一般的に児童の規範意識・道徳心・自律心の低下が課題になっていま

す。本校では「自他の考えを大切にすること」で集団の中で生まれる学びを大事にしたいという考えに基づき、主題が設定されました。また、学習指導要領には「学力の3つの要素」があります。この3つの要素を研究主題にそったかたちで、以下のような具体的な3つの柱を設定しました。

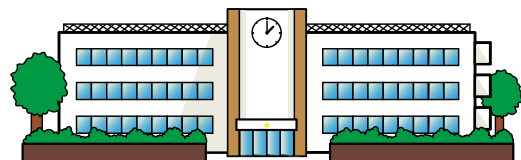
「学びに見通しをもち、主体的に学習に臨む授業」

「思考力・判断力・表現力を育てる言語活動の工夫」

「他者を理解し認め、伝え合う交流活動の充実」

本校の自主研究発表会は主題探究型授業の提案が特徴で、今回は低・中・高学年から、それぞれ公開授業がありました。低学年は、生活科の授業で、八幡山で見つけた秋の自然物を使って「あきのフェスティバル」を開き、園児と交流をします。そのために、自分たちで見つけた秋を「Xチャート」を使いながら、園児に伝えたい秋の楽しさを考える授業を公開しました。中学年では、国語の授業で「漢字成り立ちブック」を作ることを目的に、白川文字学を学習しながら、漢字同士のつながりを学んでいきました。県外からの参加者もあり、福井県独自の学習を公開することができました。高学年では、算数の授業で、八幡山を舞台にした豊小オリジナル問題に挑戦し、目的に合った道順の選び方を探究していきました。

どの学年団も、夏休みから指導案検討を行い、事前授業を経て、当日を迎えました。先生方が、一丸となって一つの授業について真剣に語り合い、練り上げていく協働の姿が、研究主任として嬉しかったです。「児童が学び合う学校は、教師同士が学び合う学校である」ことを胸に、これからも教師自らが、「自他の考えを大切にし」学び合う教師集団を目指していきたいと思ひます。



インターンシップ／週間カンファレンス報告

教職専門性開発コース2年／啓新高等学校

宮川 翔太

私達ストレートマスターは、毎週木曜日に福井大学総合研究棟V（教育系1号館）6階にあるコラボレーションホールに集まり、週間カンファレンスを行っている。午前には「今週の学びの振り返り」と「主担当企画」、午後には「公教育の課題に基づくプロジェクト学習」と「授業改革・カリキュラムマネジメント実践事例研究」の4つを語り合い、学び合っている。今回は前号の角谷院生に引き続き、10月の週間カンファレンスの学びをお伝えしようと思う。

まず、「今週の学びの振り返り」では、院生3～4名の小グループでインターンシップを通じて生じた課題や悩みを、学校種、教科の枠を超えて大学院スタッフの先生方を交えながら語り合っている。毎週異なるメンバーになるようにグループが編成されており、それぞれの院生がそれぞれの学校でどんな日々を過ごしているのかを語り合い、聴きあえるこの時間は大変貴重である。私はある週のこの時間に、悩みを一つ聞いてもらった。現在、私はインター先の啓新高校で見ているクラスで朝のSHを9月からさせてもらっているのだが、学級担任の先生が前でお話をされる時には静かであるのに、私が前で話すときにはちゃんと聞いてくれないことを悩みとして話した。どんな些細な悩みでもじっくり聞いてもらえるのがカンファレンスの良いところである。この日同じグループだった杉山先生から、「朝のSHをどんな時間にしたいと思っているか？」と質問を受けたとき、はっとさせられた。私は「大事な連絡は漏らさず伝えなければ」と、朝聞いた連絡事項を整理することに精一杯で、生徒のことを見られていなかったことに気付いた。私がやっていたことは連絡を一方的に伝えていただけだった。朝のわずか10分間とは言え、その日一日を生徒にどう過ごして欲しいのかというねらいが明確であるか否かで、私の伝え方や雰囲気にも現れ、生徒はそれを感じて担任の先生のとときは違う反応をしているのだろう。いかなるときでも、生徒の姿と教師のねらいははっきり見えていなければならぬなと感じた振り返りであった。

次の「主担当企画」では、今月の担当である中藤小学校と美浜中学校のインターン生が決めた「表現力アップ～人を引きつける教師になるために～」というテーマのもと、授業をはじめとした学校生活のあらゆる場面で教

師に求められる表現力とはどのようなものか、なぜ必要なのかを語り合った。豊かな表現力は、生徒に伝える際により分かりやすくするため、そして生徒と関係を築くために必要であり、声の大きさ、抑揚、ジェスチャーなどは要素でしかない。表現力の源となるものは、その人らしさであるという話になった。第4週では自分の実践を振り返り、グループメンバーに語ることで自分らしさを探って行った。普段から自分がどんな思いで生徒の前に立っているのか、話してみることで初めて自分の中に内在化していたものを認識できた。私は、生徒のやる気の火付け役になればと思っている。よりよい火付け役になるために、教育現場だけでは得られない様々な経験を積み、深みのある人間となっていきたい。

午後の「公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習」では、後期よりM1院生は大学生版PISA問題づくり、M2院生は公教育の理念と公教育における各教科の存在意義について、2～3人のチームに分かれて考察を始めた。

続いて「授業改革・カリキュラムマネジメント実践事例研究」では、専門教科または学校種に分かれて、それぞれの授業実践のスケジュールの確認や単元計画、これから行う授業の指導案、これまでに実践した授業の記録や参観した授業の記録を検討した。11月には週間カンファレンスにて中間報告、まとめの報告をし、それぞれのチームが検討、考察してきたことを伝え合い、深め合っていく。

また、10月16日（木）にはストレートマスターの院生全員で福井教育フォーラムに参加した。福井県外の視点から福井県の教育が語られ、実に興味深いお話が聞けたと思っている。このように院生として様々な研究集会や公開研に参加できる機会、日々のインターンシップ、週間カンファレンスの機会もM2の私にとっては残りわずかとなってきている。聴きあい、語り合い、自分たちの実践の省察を深められるよう、取り組んでいきたい。

教職専門性開発コース1年／福井大学教育地域科学部附属中学校

田村 佳子

歌で始まり、歌で終わる。福大附属中学校の音楽文化に触れて、半年が過ぎました。どの学校にも独自の文化が存在しますが、附属中学校は中でも「音楽文化」の伝統が守られ続けている学校です。どのようにしてこの音楽文化が生まれ、継承されてきたのか—

附属中学校の音楽科カリキュラムは、「歌（声）」を中心とした題材が多く、音楽集会や合唱祭などの各行事に絡められています。音楽科の3年間のテーマは「音と音楽の違いは？」。入学したばかりの1年生に「音楽って何？」という問いを投げかけ、こだわって表現や創作をする大切さに気づききっかけを作ります。「音」についての意識を深めていく中で「聴く」ことの大切さを学び、身の回りにある自然音や環境音を意識することで、様々な音の特徴に関心を持ち、次第に音の色彩感や質感にもこだわりを持つようになる。この「音」へのこだわりが、合唱などの音楽活動にも活かされ、質の高い表現力につながっていきます。限られた授業時数の中で、「耳を澄まして聴く」「心に感じたことを素直に表現する」「こだわって表現（創作）する」ことを大切にしている附属中学校の音楽科だからこそ、3年間のロングスパンの中で、活動や経験を通して広がりや深まりを見せ、探究活動の基盤となっているのだと思います。

私が初めて附属中学校の音楽を聴いたのは入学式の合唱練習で、これが中学生の歌声なのかと驚きました。入学式本番はいい緊張感が増し、体育館いっぱいに歓迎のハーモニーが響き渡りました。先輩方の深みのある歌声は、新入生の心をほぐすと言うよりも、先輩方のようにになりたいという刺激を与えていました。また、企画や運営も音楽委員が中心となって行い、先輩の姿を見て学び、アドバイスや相談をしながら後輩にバトンをつないでいき、そしてそれを支えている先生がいます。こういう生徒や先生の取組みが、附属中学校の音楽文化の伝統につながっていると感じました。

附属中学校に携わることができたことでもう一つ、先生方の研究の場も覗かせていただいています。職員会議とは別に毎月ある教育実践研究会に参加し、先生方1人1人がレポートを毎回書きます。このレポートは院生も書くわけですが、研究のサブテーマを決める夏から秋の時期は頻繁にあり、何を書いたらいいのだろうかと頭を抱え、締め切りに追われる日々でした。4月から半年以上経過していますが、今でも実践研究会では先生方のお話を聴くことに必死で、毎週ある少人数編成の研究部会も和気藹々としつつ、真剣なお話に立ち止まりながらも辿っていくことで精一杯であります。レポート

を書くことや話し合うことに慣れていない私にとって、非常に緊張する時間ではありますが、先生方の協働研究に携わることができて、貴重な経験をさせていただいています。

さて、ニュースレターを書くにあたり、4月より記録し続けているノートを読み返しました。記録ノートは現在6冊目に入り、そのときの想いや感情がそのまま字に表れているので、タイムスリップすることができます。はじめは記録の取り方でも戸惑い、授業の生徒と先生の発言や活動を4色ペンで色わけしたり、中央に縦線を引いて生徒と先生の欄をわけたり、顔文字や記号を書いてみたりと、その時なりの工夫が見えました。内容に変化もあり、5月頃までは先生の発言を一語一句落とさないように書いていましたが、梅雨を迎える前には生徒の活動や発言、行動を極力拾うようになっていました。先生がそうする理由は生徒たちにあるのだと、当たり前のことによく気づいたからです。また、記録ノートを読み返したことで、埋もれていた生徒の変化も見えてきました。生徒の変化は本当に嬉しくなります。目立つことに目が行きがちですが、1人でも多くの生徒たちと関わっていきたくて改めて思い直しました。

厳しくもあたたかい柳博恵先生の音楽の授業から、子どもたちに合わせたつなげ方や手だてを学ばせていただき、一緒に授業や合唱部について話したり考えたりすることができて、本当にありがたく思っています。また、木下慶之先生の2年A組は明るく元気のいいクラスで、担任の先生のカラーが反映されていると思います。2年A組は緩やかに変化しており、「やる時はやる」クラスです。いよいよ3年生まで半年を切ったという自覚が、2年生全体に芽生えてきたように感じます。いま生徒たちは、修学旅行に向けた話し合いを真剣に行っており、附属中学校の伝統である「音楽ドラマ」が、いかに今の2年生に合った形で工夫されていくかを、私も一緒に見守り考えていきたいと思っています。

はじめは戸惑うことも多くありました。しかし、いま目の前にいる子どもたちに何ができるかを考えながら、附属中学校の生徒たちと一緒に、附属中学校ならではの授業を、音楽や道徳で実践させていただきたいです。「授業は子どものためにあり、子どもから学ぶ以外に道はなし」。大学の教科の先生のこのお言葉を常に頭に置きながら、たくさんのご縁に感謝をして、これからも学び続けていきたいと思っています。

◆ 新しい世代を支える

October 合同カンファレンスに参加して

スクールリーダー養成コース1年／福井大学教育地域科学部附属中学校

柳 博恵

10月の合同カンファレンス。朝晩はめっきり寒くなり、着こなしも厚手の物に移行して、さっそうと大学へ。外の景色をゆっくり見ることもない忙しい毎日。いつの間にか木々の色も変化していることに気づき、キャンパスのメインロードの美しい「紅葉」を、少し立ち止まって眺めていました。(エネルギー補充!)

今回の日程は…「新しい世代を支え学び合う」をテーマに午前の部は、埼玉県立新座高校の金子奨先生のお話をお聞きして、グループ・セッション「新しい世代を支え学び合う経験と長期実践報告・1年目のまとめの構想を語り合うグループ①」、午後からは実践を語り、聴き、ひらく「自分自身の実践の挑戦を語る授業実践の挑戦、探究の過程を語り聴き合うグループ②」の内容でした。

金子先生の「若い世代を支え学びあう」実践をお聞きして、印象に残った言葉は「戦略」です。某テレビドラマで医局の統括、「戦略」という名称を耳にしたこともあり、ここで使われる「戦略」ってどういう意味?と真剣に考えていました。タイムリーなことに新座高校の「協働化」という戦略で、困難な事態に立ち向かってこられたこと、4年間にわたる「協働化」戦略は、さまざまな面でプラスの影響を与え、成果として現れてきていることなど「なるほど!そうそう!わかるわ!」と共感する場面がたくさんありました。

附属中では、「探究」と「コミュニケーション」をキーワードに、授業実践を中核にした研究を進めており、「探究するコミュニティ」に取り組んで10年余りが経過しました。

探究活動を行う中で、より質の高い学びを生むためには、「コミュニティ」の存在が必要不可欠となってきます。仲間と協働で取り組むことを通して、自分の思いや考えを自分の言葉で表現すること、また、他とのかかわりによって自分の考えを捉え直し、さらに考えを広げたり深めたりするようなことが重要となります。

そのため、子ども同士が学び合う協働的な学びにつながるような授業や、子どもたち自身が、自分の学びを実感し、将来何につながげ、または、何につながっていくのかを構想することができるような授業づくりに全教科で取り組んでいます。チーム附属中の教師の協働も研究体制の中で仕組みられています。金子先生のお話をお聞きすることで、自分の学校の実践を改めて振

り返り、研究のしつこさを解明していきたい気持ちが高まってきました。

グループ・セッション「新しい世代を支え学び合う経験と長期実践報告・1年目のまとめの構想を語り合うグループ①」では、各学校での授業や研究の取組や教職大学院生との関わりなど現状について語り合いました。

本校では、教職大学院の拠点校で4名の若い院生さんたちと一緒に授業づくりをしたり、日々の学校生活を送ったりする中で、新たに気づかされることや、一緒にアイデアを生み出したり、共に学んだりする場面が数多くあります。M2からM1へ語り継がれること、現職教員から新しい世代へ残していきたいことなど、学年会、職員会議、部会や研究企画、教育実践研究会など組織の中に位置づけられている語り合える場があるからこそ、本音の対話があり、目の前にいる子どもたちについてじっくり語り合えることができるのだと思います。

グループ・セッション『自分自身の実践の挑戦を語る』「授業実践の挑戦、探究の過程を語り聴き合うグループ②」では、先生方のこれから授業で実践したいことをお聞きし、どのように展開していくと、子どもたちが主体的に活動できるかを一緒に考えることができました。

私の後期の授業では、子どもたちが学びを実感する「質の高い学び」を構築し、型にはまった授業形態ではなく、子どもたち自身が必然性を感じ、個人で、仲間と、集団で、学習課題を解明していくプロセスを重要視していきたいです。「学びを実感する協働探究をデザインする」ことに焦点をあて、今一度“探究”について捉え直し、どんなときに子どもが学んでいると実感できたかを探っていくことで、自然と探究や学びの必然性や学びをつなぐことに視点を持つことができると考えています。カリキュラムの単元構成、単元と単元をつなぐ、子ども同士をつなぐ、そのための教師の関わり方を研究していきたいです。また、主題についても明確な学びの意識と見通しをもたせることができるように設定をし、「個の学びを協働の学びにつなぐ」「学びを実感する」「一人一人の学びを高めるために」など、個を大事にした取り組みに挑戦していきたいです。

教職専門性開発コース1年／中藤小学校

高橋 聡志

10月18日に行われた合同カンファレンスに参加した。久々の合同カンファレンスということで、4月当初のような緊張感をもちつつ臨んだ。今後、一単元の授業実践を予定している私にとって、新たな視点を得ることができる貴重な時間となった。

日程は、新座高校の金子先生によるオリエンテーションからスタートした。今回のテーマは「新しい世代を支え学び合う」。新座高校の公開授業研究会や初任者カンファレンスなど、若い世代にとっての研究会についてお話をいただいた。その中でも、「教師の熟達への筋道」、「伝達者から媒介者へ」という二つの点について、重点的に取り上げられていたように思う。そのため、グループセッションでは、その二点について話し合うこととなった。前者について山本院生は、「この2年間は戦術を学んできた。教職大学院に来ていなかったら技術ばかり学んでいたかもしれない。長い時間をかけて戦略を立てていきたい。」とお話をされた。稲垣先生は「技術が悪いという風潮が流れているがそれはよくないんじゃないか。」とお話をされた。これらのお話を聞いて、考えたことがある。それは、技術は重要で、技術がないと教えられないし伝えられないということ。また、その技術を学ぶ方法としてカンファレンスがあったり、公開研究を行ったりするのだということ。私はこの合同カンファレンスで、先生方から技術を学び、視野を広げている。それを省察することで戦術または戦略を立てられるのだと感じた。後者では、伝達者と媒介者の違いについて話し合った。伝達者はイメージがしやすかった。自分が話したいのでしゃべりが多い。黒板の前に立って板書で子どもをコントロールする。このように、教える立場に身を置いているので、伝達者から抜け出せないのではといった意見が出ていた。また周りの先生方からの目も気にしてしまうために、板書による授業に落ち着いてしまい、結局伝達者としての授業になってしまうのではといった意見もあった。一方で、媒介者は定義付けが難しいという話になった。そこで出てきた解釈が「子どもと子どもをつなぐことが出来る教師や、教師の存在を忘れる位に教材にのめり込ませることの出来る教師」である。子どもと教師だけではなく、その間には教材がある。子どもを教材に向かわせるための手立てが教師には必要なのだという意見であった。

午後の日程は、「自分自身の実践の挑戦を語る」ということで、これまで取り組んできた授業実践や、今後の展望などを話し合った。グループ2では主に河邊

院生の家庭科の授業実践、砂原先生の算数の授業実践について話し合った。河邊院生は家庭科の調理実習を扱い、考える調理実習にしていきたいと語っていただいた。「なぜその切り方をするのか。」など「なんで？」ということを考えて取り組んで欲しいとしていた。また、調理実習では8割が準備で計画が命だとし、そのためには、単元計画を綿密に立てていくことが重要であるとしていた。砂原先生は、算数の「面積」の分野を扱い、「言語活動」をもとに伝え合う活動を行いたいとしていた。ここで議論となったのが、グループ活動で話し合いをさせるかどうか、という点である。話し合いをさせるには、課題の与え方や、何を話し合わせるかを考えておかななくてはならない。また、違う考えをもった児童らで構成させてもいいが、表現能力が弱い児童だと、違う考えばかりの児童がいる中で話しにくいのでは、といった意見が出ていた。まずは同じ考えをもった児童同士で構成し、その後違う考えをもった児童で語らせることで、学びが深まるのではといったアドバイスがなされた。同質の学びがあっても異質の学びがある。グループ学習では様々な意見が出てくるが、「いろいろあってよかったね。」で終わるのではなく、どんどんスリム化、構造化していかなければならない。この話し合いで、グループ学習を行う際に考える新たな視点がもてたのでよかった。

今回の合同カンファレンスを通して、若いからこそ、院生だからこそできることは何かと改めて考えさせられた。また、今後の授業実践の参考となる貴重なお話を聞くことができた。今のクラスで過ごすことができるのもあと5ヶ月を切った。残りのインターンで自分に何ができるのかを考えながら取り組んでいきたい。



書評

「人はなぜ、同じ間違いをくり返すのか」

～数学者が教える「間違い」を生かすヒント～

著者 野崎昭弘／2014年7月 ブックマン社 1300円＋税

私はとてもあわてんぼうだし、小さな間違いや失敗をよくする。しかし、そのことから「人はなぜ？」と考えることはなかった。落ち込むことも多くあったが、自分の性格だから同じ間違いをしないようにしようと思っただけだった。今年の7月に発刊されたこの本は「間違い」について数学者の目から普遍的に大胆に「間違えることは怖くない」「間違いは本当にわかるための大きなチャンス」とさまざまな「間違い」に着目し、その意味について書かれてある。

本書の構成は、＜第1章 人は間違える動物である＞＜第2章 「間違い」の本質を探る—どんな人が、どんな間違いを犯しやすいか＞＜第3章 「間違えること」の意義—考える力を養うために＞＜第4章 「間違い」から何を学ぶか—どうしたら間違いを生かせるか＞の4章立てだ。各章には小見出し、例えば第1章には・「間違える」とはどういうことか・コンピュータは絶対にまちがえないか？・頭がいいから間違えない、わけではない・・・などあってとても読みやすい。第1章の最初の「間違えるとは」に「私が定義する『間違い』とは、いくつかの選択肢があって自主的に選べる場合に、そこで『最適でないものを選ぶ』ことである。間違えることは、ほかの動物にはない人間の特権である。ならば、それを利用しない手はないだろう。」を基本に「間違いから何を学ぶか」に意義があると書かれていて、納得と心の安らぎをもらいながら読み進めていける。

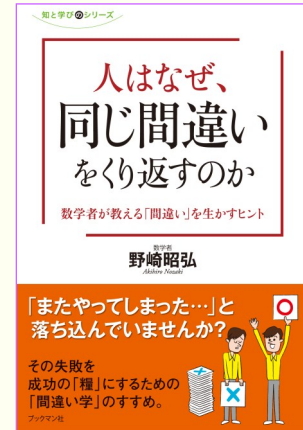
＜第2章 「間違い」の本質を探る＞では7つの思考タイプからわかる「間違い」の特徴が書かれている。紹介すると(1)落雷型・・・なにかひらめいたらすぐにそれに飛びつく。思い込みが激しいのでケアレスミスが多い。(2)猫のお化粧型・・・同じことをくり返してばかりいて前に進まない。新しいことに取り組まないために視野がまったく広がらない。(3)めだかの学校型・・・群れるのが好きで付和雷同に慣れている。自分で考えないで周囲に従ってしまう。(4)這っても黒豆型・・・頑固一徹で自分の間違いを認めようとしない。本当に議論すべきところの議論を深めない。(5)馬耳東風型・・・反対意見も賛成意見に聞こえる都合のよさ。集中力や厳密さに欠けているので、細かいミスを手放しにする。(6)お殿さま型・・・下々の痛みや苦しみが理解できない。他人の気持ちを考える習慣がなく、相手の立場に立って考えることができない。(7)即物思考型・・・抽象的なことを考えるのが大の苦手。意味を考えずに丸暗記しようとする。

る。一般化が苦手なためにちょっと事情が変わると応用がきかない。・・・とある。自分もそうだと思うながら、おもしろい比喩に笑ってしまったが、「自分だって間違っているかもしれないという発想を、常に頭に置いておくこと」と野崎氏は言う。本当にその通りだと思う。その上で、いろいろな人とのつきあい方や相手の意見を聞くときには「何を言いたいのか」をきちんと理解しようとすることの大切さを教えられたように思う。

＜第3章「間違える」ことの意義＞では学校は「間違い」が許される場所であり、「間違える授業」で考える癖をつける重要性が書かれてある。県内の学校訪問をさせてもらって、あちこちの学校に「教室はまちがうところだ」の詩が大きく掲示してあったり、「子どもの未来社」から出版されている絵本を読み聞かせているのを見聞きする。授業で子どもたちが安心して自分の考えを発表し、どんな「間違い」も生かしてもらえる体験がより深い学びを作っていくことと思う。深く学ぶということとは「覚える」ことではなく「考える」ことであり、「本質を理解する」ことなのだ。それでは「どうしたら間違いを生かせるか」が＜第4章「間違い」から何を学ぶか＞に述べられている。「わかるためには間違えることは欠かせません。間違いをしたときに、その内容を分析することでわかることに近づく」「いい間違いとは反省のしがいのある間違いであり、あとの成長につながる間違い」とある。その反省に至らない、反省の邪魔をする3つの要素が「犯人探し・責任のなすり合い」「成功体験」「プライド」だとある。これらについてたくさんの事例が紹介されているが、そこは読んでもらうことにして、どのように「間違い」を分析し、考えていくのかの提案が一番心に残ったことである。それは「考えつくしたなら放っておいてもいい」「プラスの反省が再発防止に役立つ」「視点を変えることで盲点を減らしていく」「ものごとを俯瞰して見ることの大切さ」とある。

授業において、間違っていないかもしれないがうまくいかないことは常にある。子ども理解が足りなかったり、教材が本質的でなかったり等と。初めにあった「間違いとはいくつかの選択肢から最適でないものを選ぶこと」と考えると、最適なものを選ばなかった「間違い」を捉えて省察することも大事ではないだろうか？

(山野下とよ子)



研究
紹介外国人児童生徒の
母語の保持育成を保障する教育の試み

福井大学教職大学院／特命助教 半原 芳子

私はこれまで日本語を母語としない方々への言語教育に従事してきました。具体的には、国内外の大学、大学院、財団法人、企業等で、留学生や外国人研究者、ビジネスパーソン、技術研修生、介護福祉士、看護師の日本語教育に携わってきました。また、地域の日本人住民と外国人住民の相互学習および外国人児童生徒の第二言語（日本語）の習得と母語の保持育成にも関わってきました。今日はその中から外国人児童生徒への言語教育について紹介したいと思います。

グローバル化に伴い日本語を母語としない外国人児童生徒の増加と多様化が進んでいます。就学義務がない彼らへの教育のあり方は、現場の先生方が日々試行錯誤している状況にあると言えます。外国人児童生徒には第二言語である日本語の他に「母語」があります。母語は子どもの認知面においても親との関係性においても非常に大切なものです。外国人児童生徒の教育のあり方を考えるとき、彼らの母語の発達の保障を視野に入れた教育が必要だと思えます。私はそうした思いからこれまで仲間と共に、主に首都圏の公立中学校で「教科・母語・日本語相互育成学習モデル」(※1)に基づく学習支援を行ってきました。このモデルは、母語と日本語の両言語を使い教科学習を行うことで、教科内容の理解・母語の保持育成・日本語の伸長の三者を相互に育成することを目指すものです。進め方は、まず、学習時間の前半を子どもと子どもの母語話者支援者（例：韓国出身の子どもと韓国出身の支援者）が教科（主に国語）の内容を母語訳教材やワークシートを用い母語で学びます。次に、後半を子どもと日本語話者支援者が日本語で学習を進めます。

ここでは、母語での学習の様子を紹介します。次の会話(※2)は、東京都I中学校の日本語学級に通う韓国出身の子どもへの学習支援でのものです。中1のU子さんと韓国語話者支援者KTが、国語の教科書の単元『空中ブランコ乗りのキキ』の最後の場面を読み、やりとりをしています。「次の日サーカスのテントの上に座っていた白い鳥は何だったのか。なぜそう思うか。」というワークシートの問いにU子さんは、自分の意見を述べたり(①)意見の根拠を説明したりしています(③)。また、KTはU子さんに物語の伏線を拾うよう働きかけています(④)。

母語による学習で、U子さんが自分の既有能力を発揮し、豊かな想像力や創造力、思考力を育てているのが分かります。その後日本語での学習を行います。U子さ

- ①U子：キキ였을 것 같아！（キキだったと思う！）
- ②KT：왜 그렇게 생각하는데？（なぜそう思う？）
- ③U子：그냥…마을 사람들도 키키라고 생각하고…
음…그냥 키키가 없어졌잖아.（ただ…町の人々もキキって考えてるし…うん…何かキキがいなくなってるんじゃない）
- ④KT：음…잠깐 우리 그 전에 마을사람들이 왜 그렇게 생각하는지 생각해 볼까？ 아, 근데 말야 생각해 보면 평소에도 마을 사람들이 키키를 보고 새 같다고 했던 것 같은데, 음…（うん…ちょっとその前に町の人々が何でそう思うのか考えてみようか。あ、ところで、考えてみると、普段からも町の人々がキキを見て鳥みたいって言ってたような気がするんだけど）
- ⑤U子：아, 키키가…공중그네를 탈 때 마을 사람들이 새 같다고 했어.（あ、キキが…空中ブランコに乗るとき町の人々が鳥みたいって言った）

んは既に母語による学習で内容を深く理解しているため、日本語による学習では主に語彙や表現面に集中することができます。

子どもの母語の保持育成を保障する教育は一人ではできないものではありません。学校の先生や地域に住む大人（日本人・外国人）、また関係機関や大学が手を取り合っていくことで可能になると考えます。福井でも外国人の子どもへの教育のあり方に悩んでいる先生方がいらっしゃると思います。今後そうした先生方と一緒に外国人の子どもへの教育について考えていけたらと思っています。

※1 岡崎敏雄(1997)「日本語・母語相互育成学習のねらい」

『平成8年度外国人児童生徒指導資料』茨城県教育庁指導課

※2 佐藤真紀・岡崎眸・清田淳子・原瑞穂・朱桂栄・小田珠生・高橋織恵・半原芳子・大上忠幸・宇津木奈美子・三輪充子・Alexandra Makhrakova・秦松梅・公平・齋瀟瀟・趙有珍・桃井菜奈恵・柏楊(2013)「『NPO法人子どもLAMP』13年間の軌跡—言語少数派の子どもの学びを支える実践—」『言語文化と日本語教育』45号, pp. 31-34.

福井大学教育地域科学部附属特別支援学校
 平成26年度 **公開研究会のご案内**
11.28 金 9:40—16:30 【参加費無料】
 開場：福井大学教育地域科学部附属特別支援学校（福井市八ツ島町1字3番地）

研究テーマ
 『学校・地域・家庭のつながりの中で育つ
 ～一人一人が活動と参加の質を高める～』（3年次）

日程

9:40	10:00	11:30	20:00	13:00	13:40	15:50	16:30
受付	授業公開 (自由参加)	校舎見学 授業振り取り コーナー	昼食	全体会 校長挨拶 研究概要 全体和音	移動	分科 分科会研究概要説明 研究協議 意見交換 など	

お問い合わせ 福井大学教育地域科学部附属特別支援学校 担当：常廣和美
 〒910-0065 福井市八ツ島町1字3番地 TEL：0776-22-6781
 e-mail：f-tokusi@f-edu.u-fukui.ac.jp

福井大学教育地域科学部附属小学校
 第40回 **教育研究集会のご案内**
12.5 金 9:00—16:30
 開場：福井大学教育地域科学部附属小学校（福井市二の宮4丁目45-1）

研究テーマ
 「聴き合い、つながり合って、
 学びを深める授業をつくる」（1年次）

内容
 全体会、公開授業、分科会、講演会

講師：昭和女子大学大学院 教授 押谷 由夫 先生

お問い合わせ 福井大学教育地域科学部附属小学校
 〒910-0015 福井市二の宮4丁目45-1 TEL：0776-22-6891

実践し 省察する コミュニティ

*Fukui Round Tables:
Spring Sessions
For Reflective Practice
And Organizational Learning
in University of Fukui*

For Communities of Practice and Reflection since 2001

2015.2.28-3.1

実践研究 福井ラウンドテーブル
 2015 winter sessions
 福井大学総合研究棟V（教育系1号館）/AOSSA



Schedule

11/15 sat 合同カンファレンス・A日程

11/22 sat 合同カンファレンス・B日程

【編集後記】

秋の深まりとともに紅葉が日に日にその美しさを増す頃となりました。秋といえば、福井では多くの学校で公開授業研究会が開催される時期でもあります。今回掲載した「ポストン・ニューヨーク教師教育の国際動向調査の報告」でも少し触れられていますが、今、世界の多くの国々の教師たちが、授業研究の在り方を日本から学ぼうとしています。福井で展開されている授業研究会は世界に誇ることのできる教師文化です。研究会に積極的に参加し大いに学び合いましょう。（二宮秀夫）

教職大学院Newsletter No.67

2014.11.15発行

2014.11.15印刷

編集・発行・印刷
 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
 教職大学院Newsletter 編集委員会
 〒910-8507 福井市文京3-9-1
 dpdtfukui@yahoo.co.jp